



●第10回ニューヨークギターセミナー

2010年7月5日～11日の間、マンネズで開かれた第10回記念ニューヨークギターセミナーは、5日間にわたってマスタークラス、講義、合奏練習、演奏が行なわれ、締めくくりのアンサンブルには24名の教授陣の他にセミナー参加者が演奏に加わった。今年のテーマは「最前線：ギター芸術の新天地」だった。芸術監督のマイケル・ニューマンとローラ・オルトマンは、このマンハッタンで開かれた夏期ショーケースについて「ギターの将来は、現在我々の手中にあるのです。ですから、今回は過去50年間に、アメリカで最も大きな影響を与えた作曲家の中で優れた若手作曲家がギターのために書いた、わくわくするような作品を聴衆の皆さんに聴いていただく機会を作りました」と語った。

アメリカン・ソサエティーで開かれた夕刻のプレコンサートでは、オープニングにホルヘ・カバジェロ Jorge Caballero の演奏を特集し、エルネスト・

ガルシア・デ・レオン Ernesto Garcia de Leon の〈老人 El Viejo Op.15〉、〈ソナタ Op.13 Las Companas から ソンソン〉、エリオット・カーターの〈変化 Changes〉と〈かけら Shard〉を謙虚ながら奥深いプレゼンテーションで無理なく演奏した。

セルジオ・アサドの娘クラリスが、ニューマン & オルトマン・ギターデュオとピアノと歌で共演し、セルソ・マシャド Celso Machado の快活な〈Xaranga do Vovo〉と〈Sambalanco〉を演奏した。ついで彼女自身の技巧を凝らしたスキャット・ピース〈アドリブ〉を演奏した。ベス・イラーナ・シュナイダー Beth Ilana Schneider のヴァイオリンとマット・グールド Matt Gould のギターによるデュオ46が、ホルヘ・リーダーマン Jorge Liderman の美しい無言歌〈Aires de Sefarad II〉46曲を世界初演した。この曲は2人のために作曲された作品である。アクロン大学のギター課主任教授で、オベルリン音楽院のギタープログラム創設者であるスティーヴン・アーロンが自身の作品を、調弦を替えながら演奏した。この曲はヴィラ＝ロボスのスタイルを思い起こさせるような指盤上をメロディックに移動する指の動きと、伸びやかなトレモロと和声で構成されていた。デュオ46は、アルゼンチンの作曲家マルセラ・パビア Marcela Pavia が作曲した〈Los Senderos que se Bifurcan〉を美しい水の流れるような響きで演奏した。ニューマン & オルトマン・ギターデュオはアグスタ・リード・トーマス Augusta Read Thomas のデリケートで、哀愁を帯びた、夢のような〈Memory: SWELLS〉を演奏、続いてクラリス・アサドがピアノで共演しスキャット・ソング〈アドリブ〉をアンコールで演奏した。

デイヴィッド・タネンバウムは、ベースのケビン・ウェンユー・メイナ

Kevin Weng-Yew Mayner、チェロのアンドリュー・リー Andrew Lee とともにニューマン & オルトマン・ギターデュオと共演し、チェロとギターカルテットのために書かれたソフィア・グバイドーリナ作曲の〈Repentance〉を演奏したが、歌うようなギターの低音弦とベースとの対話が素晴らしい、メロディックな作品だった。

バリトン歌手兼ギタリスト兼作曲家のフランク・ウォーレスが10弦ギターのオリジナル歌曲数曲を演奏したが、メゾソプラノで詩人のナンシー・ノーレス Nancy Knowles とデュオ・ライヴオーケルが共演した。彼らのプログラムは、ウォーレスのルーツが古楽であることを明らかにした。

デュオ46は、作曲家ジャック・フォートナー Jack Fortner が鳥のさえずりのようなピッチカートを多用した作品〈Equal Voices〉を世界初演し、続いてマイケル・ケル Michael Quell 作曲の感情よりも知性に訴える作品“微分音の多声部による巨大な和音 microtonal, multi-voiced hyperchord”と表示された知性的な〈神秘 Enigma〉という曲を演奏した。

デイヴィッド・タネンバウムとロナルド・ブルース・スミスが共演して、スミス作曲の〈ギターとエレクトロニクスのための5つの小品〉を演奏したとき、タネンバウムが特殊効果を出すために彼のギターをラップ・トップ・コンピューターに接続してチベットの銅鑼のような音を出した。続いて、ロサンゼルス・ピアース大学音楽学部教授で毎週ラジオ番組のホストをしているジョン・シュナイダーがギターアンプを通した幾種類もの珍しいギターを使って聴取を魅了した。その中には、取り外し可能なマグネット式のキーボードを弦の下に装着したフォクト Vogt の微分音クラシックギターや、純正律ナショナル・トライコーンギター、リフレットされたナショナル・スチールギターがあった。

リオデジャネイロ出身で、ブラジルのフランク・ザッパと呼ばれるアーサー・カンペラ Arthur Kampela が、この晩のコンサートのクロージングとして、彼が作曲した〈ソロ・ギターのための打楽器研究II〉、〈ヴィオラ・アラ・キタラのための打楽器研究IV〉、現在進行中の新作〈チェロ・アラ・キタラのための打楽器

クラリス・アサド (Pf) と、ニューマン (右) & オルトマン (左)・ギターデュオ



研究 VII) を演奏した。いずれの作品もそれぞれの楽器を演奏することによって、草にマイクを付ければ聴こえるかもしれない昆虫の地を這うような音や、発泡スチロールの塊を使ってチェロの表面やギター の 6 弦を擦ってだすキーキー音、コイルスプリングでヴィオラを軽く叩く音など、新しい音の世界を求めている。

金曜の午後のコンサートは、ブルガリアのギタリスト兼作曲家アタナス・ウルクズノフと妻でフルーティストの小倉美英を特集した。ウルクズノフは叙情的な小倉のフルートとの合奏で、自作のバルカン・ブルガリア風の数曲と、ブルガリアの伝統的なフォーク及びジェルジュ・リゲティのピアノ曲をギター用に編曲した素晴らしい《Musica ricercata》を演奏した。小倉は日本の高松音楽高等学校で学び、大阪で開かれた全国学生フルートコンクールで優勝後、パリの国立音楽院に留学した。

ウィリアム・アンダーソンとオーレン・フェイダーは、チャールズ・ヴオリネン Charles Wuorinen、ポール・ランスキー、フランク・ブリッケル、ミルトン・パビットの作品に加えて、アンダーソンの自作《Little Duo》をデュオで演奏した。ヴオリネンはニューヨーク生まれの作曲家だが、最年少で、音楽でピューリッツァー賞を受賞したことで有名。レディオヘッドの歌《Idiotique》では、ランスキーの作品《Mild und Leise》の一部を採用している。

ダン・リップルはマリオ・ダヴィドフスキーの《シンクロニズム Op.10》を演奏し、予め録音したテープを使ったギターの激しいイントロで幕を開けた。ダヴィドフスキーは、マンハッタン音楽院とイェール大学で学んだ作曲家で、ピューリッツァー賞を受賞している。

ジョン・シュナイダーは、ルー・ハリソンの純正律ギターのための作品である《ギターのためのセレナーデ》とテリー・ライリー作曲のリフレット・ナショナル・スチールギターのための魅惑的な《Quando Cósas Malas Caen del Cielo》を演奏した。

プリンストン大学で作曲専攻の博士課程の学生であるアンドリュー・マッケナ・リーが、バッハの《プレリュードニ短調 BWV999》と、彼自身の作品であ

る《バッハのプレリュードの5つの屈折》(Five Refractions of a Prelude by Bach)、《スコルダトゥーラ組曲》から2曲を演奏。さらに彼

の作品《the dark out of the nighttime》をアメリカ・ルーカスのフルート、ヴィクター・ローリーのヴィオラ、キャサリン・アンドリュースのハーブで構成されたトリオ・カヴァクと共演した。

芸術監督のマイケル・ニューマンが「今回のニューヨークセミナーの最後のコンサートは、ジュリア・クロウの魅惑的な音楽で始まったが、プログラムは彼女のデビュー CD からオリジナル作品《煙と鉄》、近くリリース予定の CD から《光の帝国》を取り上げました」と語った。「彼女の選曲は、エレクトリックギターを使ったフィンガースタイルで演奏されたがクラシック、ブルース、エレクトロニカ、ケルティックなどの影響を反映したものでした。彼女は、演奏した曲目ごとにアップル・コンピューターのラップトップを使って電氣的に作られた驚くべき音の多彩さによって聴衆を、新しい音楽の世界に導いたのです」

ブラッドレイ・コルトンとエリザベス・ジャンセンのギターとフルートのデュオが、アメリカの現代作曲家たちの作品を演奏した。その中にはシェイファー・マホニーの《陽光あふれる河》、ロバート・ビーザーの《山の歌》から2曲、デイヴィッド・ライスナーの《Away》が含まれていたが、《Away》は現在マンハッタンのディラー・クエイル音楽学校で客員アンサンブルとして活躍しているアークデュオに献呈された作品。

最後にナポリのマルコ・カッペリが、ケン・フィリアノのベース、タケイシ・サトシの打楽器との共演で熱狂的なジャム・セッションを行なった。カッペリはイタリアのパレルモにあるヴィンセント・ベリニ音楽院のギター科主任教授で、2004年にはニューヨーク大学とジュリアード音楽院の客員教授に任命されている。

芸術監督のマイケル・ニューマンは「ローラと私が、このギターセミナーを



アンサンブル・レッスンをするデイヴィッド・タネンバウム

始めたのは、クラシックギターの愛好家に、我々が“音楽のテクニク”と称する音楽理論、アナリーゼ、イヤートレーニング、初見能力、音楽史を学ばせ、オールラウンドな音楽教育を通じて、多様なスタイルと時代を越えた音楽を理解し、解釈し、演奏し、教育できるように育てることでした」と語った。「世界中のギタリストが、南北アメリカ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、太平洋や大西洋の数多くの島々からニューヨークに集まり、気楽な雰囲気の中で、地球上の偉大な音楽家から学べることに、我々はとても感激しています。美味しいレストランが歩いて10分程度のところにあることも悪くないのではないのでしょうか!」

ローラ・オルトマンは「このセミナーが、クラシックギターに興味のあるすべての人に門戸を開き、競争的ではない学ぶ環境を提供しています」と述べた。「聴講生としての参加も可能ですが、年齢・レベルを問わず多くのギター愛好家が、この活動に参加して、深く学ぶことを経験してくれることを願っています。同時に、参加者の多くの希望を叶えられるような内容にするように研鑽を重ねるつもりです。皆さんが、実際は好きだけでも、それに気が付いていないような音楽、即ちギターの現代音楽に接する機会を提供したいと思っています。今回コンサートで演奏された曲は全て1985年以降に作曲された曲なのです!!」

第11回マンネス・ニューヨークギターセミナーは2011年7月6日～10日の間に開催されるが、テーマは《クラシック・ギターデュオのテクニク》である。このイベントでは国際的に著名な芸術家を教授陣とするコンサート、マスタークラス、ワークショップ、テクニクガイドを予定しているが、詳しくは来年早々に発表される。

URL : <http://www.mannes.edu/guitar>